

蝶の博物詩

蝶と花 2

訪花2



モンキアゲハとハイビスカス
(1997年10月26日 奄美大島)

photo by

Nishiyama



ジャコウアゲハとブッドレア
(2012年9月22日 鎌倉)

蝶の博物詩

蝶と花2

訪花2

蝶がはじめて地球上に現れたのは白亜紀の後期、およそ8000万年前といわれている。ゴキブリよりはるかに後輩である。原始的な蝶はアゲハチョウの仲間で、南半球に広がるゴンドワナ大陸のキシタアゲハと北のユーラシア大陸にはじまるウスバアゲハ（ウスバシロチョウ、本誌17巻6号）の2群がある。彼らの子孫が恐ろしい大陸大移動や、ヒマラヤの隆起、何回もの氷河期をよくぞ乗り越えて進化してきたと驚嘆する。

白亜紀前半の植物といえばソテツ、シダなどの裸子植物が主で、後半になってから現在われわれの生活に関係の深い被子植物が出現した。新生代第三紀の前半、陸地はほとんど森林でおおわれていたが、第四紀には方々に草原が出現し、蝶は森林から外へ出て、花蜜に栄養源を求めて花園を飛び廻ったに違いない。この状態を蝶屋は“訪花”といい、草原性の蝶に分類し、もう一方の森林性の蝶と対比させている。かくして花蜜を重要な食物とする蝶は、樹液や獣糞を好む森林性の蝶よりも、新しい時代に現れた種とみなされる。

訪花する蝶といえば、すぐに大型のアゲハチョウが眼に浮かぶ。樹液も花蜜も好きという二刀流のタテハチョウ（アカタテハ、ルリタテハなど）もいるが、森のなかで樹液を飲んでいるアゲハチョウをみたことがない。

モンキアゲハ（図）、クロアゲハ、カラスアゲハ、ナガサキアゲハなど、黒い大きな蝶の口吻は3cmほどの長さがあり、蜜源の深いヤマユリ、ツツジ、ウツギ、サツキなどの花に好んでやって来る。口吻が2cmほどのキアゲハはタンポポ、アザミなど草原の花を好み、さらに口吻の短いアオスジアゲハはヤブカラシ、カラスザンショウのような蜜源の浅い、小さな花の集合体で吸蜜する。

奄美、沖縄の青空に映える赤いハイビスカスは黒い大型のアゲハチョウと好一对で、その筒状の花弁、突出したオシベは彼らを誘惑する。ハイビスカスにはまたツマベニチョウも山の頂から素晴らしい速さで降下してくる。

蝶の好きな色は種類によっても異なるが、黒いアゲハチョウ類はとくに赤い色に惹かれるらしい。実験では、人工の赤い花のモデルにも飛びつき、口吻を伸ばして蜜を探す仕草をするという。

赤色は生物に不思議な力を示す。ヒトが生後2、3カ月頃、はじめて認識する色は赤であり、ヒトを含む動物は紅蓮の炎の色に本能的な恐怖を感じる。戦争中、燃える東京の空を染めた奇妙な茜色をみた感触は今でも忘れられない。のちに皮膚科医となってさまざまな“紅斑”をみ、その病理学的な奥深さに抱いた畏怖の念にも通じる。

“いろいろな種類の蝶が来ます”とブッドレアを教えてくれたのは仙台市の笠井達也先生である。庭の一隅に植えてから数年、赤紫色の小花が密集した、太く、長い花穂には、夏から秋までの長い間、アオスジアゲハ、ナミアゲハ、ジャコウアゲハ（図）のほか、キタテハ、アカタテハ、ヒメアカタテハや種々のヒョウモンチョウまでやってきて、通る人の眼を楽しませている。

西山茂夫